昭和六年二月二十六日発行　通巻七号

會報

第二年第二号

関西の連中今年はまだ誰もスキーに行かない、家を持つとおかく独身者が考へる程容易に出られるものでない、口惜しいけれども仕方がおく渡邊は入院中だから勿論同行は不可能だ、高木を誘って見たが可愛いつラウを只独り留守居らせることがつらかつたのかどうか其の辺の消息は不明だが色よい返事がして貰へなかつた、残る所は僕と熊さんの二人限り、二人とふると話も早い月給袋が空にふらぬ中にといふので二月一日処は近江、名にし負ふ琵琶湖の北岸牧野のスキー場へ出かけた京阪電車の宣傳によると比良の支脈と蛾ケ岳の裾野の交はる処廣袤二十万坪の大スキー場で前には仲住島の美景を眺め海内稀れに見る好適の場所だ、而のみならず海外にも類の例を見ないスキー語の就航前夜は船内でグッスリと熟睡して翌日は早朝から元気一杯活躍が出来るといふとの実に理想的だ、そんな工合で人気はまた素晴らしい前賣切符も早く打かぬと賣り切れで其の當日買はうおど云ふ不心得者はとても行く資格なしだ、

天満橋京阪電車の終点へ行って見ると驚いた、誰かの言ふはないけれども静かなることは林の如からぎるスキーの林、よくもまあ元程行とこことだと先づ驚いた、然しスキー専用電車で仮々と行けるのに気持をよくして浜大津についそ見てまた吃驚実に素晴らしい人出だ、然し各自に寝台と毛布は行き渡るとの話ふので落ち付いてるたら豈計らんや夜から〳〵入って来るお客で寝台所か毛布うへふいおまけに横にふることへ許されぬ有様に今更憤慨しても初まらふい、宣傳にうまくひつかけられた者が馬鹿ふのかも知れおいっ比良の支脈と蛾ケ岳の裾野の交はる所しえふど余りに馬鹿〳〵しい空言だ、然し之が宣傳の効ふのかも知れおい。

船が愈〳〵勧進帳で有名ふ海津へ着いたのが午前の三時夜明けまで船内で睡る筈ふんだがとても眠れどころでおいので思ひ切って飛び出した朧月か雲間を出入してゐる牧野まで六キロ自働車に乗る、とにした、僕等の乗つたのはバスだがやみに詰め込むそして云ひ草がよいトラックに積まれるより

は皆だらうと事実大部分の者はトラックに積み込まれて運ばれてゐるのだ運転手の不慣れに道幅が狭い程度か膳をゆやさせた牧野に着いても夜は明けない、待つ間の長い事スキー場は寒かに悪くふいやうだ、九時頃から雨で十時半頃然さんがスキーを折ってしまった、雨は止みそうにもない気を腐らして晴過ぎには帰へることにした。所が帰へりは雨の中をトラック積み、人間も之まで下ってはお終ひだ、雨曝しで荷物より非道はおまけに自動車の運転は全く無統制ですれ違ふ度に必ず立ち往生雨は遠慮ふく降ってゐる我ふがらみじめな姿だった、

帰へりの汽船の内では女学生の口百パーセントふ話もふいではふいがそんふ話は聞き度くもふいだらうし話す丈け野暮かも知れふいから之の位にしておく、

（トンボ）

あやしいはふし

早く眼の覚めるのは病院だ、カーテンが引かれる、何処迄も建物だ。桃色の雲が静かに垂れてその上は空が青い。今日も天気がよさそうだ。建物はみんふ横顔を朝の光に染めてゐる、音一つしふい。大阪にゃんふ美しい眺めが、まるで大きふ沼だ。強い光が岸の緑を燃え立たせても鳥は立たふい。ゾナの幹を赤々と照らし出しても森は暗い。

そんふときにも僕達はゆっくりする事を許されふいのが普通だった。今でもよく思ふ、トウヒの森の白く光る破風の小舎や、河原の縁に駒鳥の歌ふ北沢の小舎にもっとゆっくり居たかったと。けれども今日はいつまでも深てゐられる、この美しい街を見て、桃のそばの壁に鉛筆でかわいい林檎が書いてある。前にゐた人も食べたかったのだらう。阪急前の雑踏を色物巡査の振る手に急ぐ母親に、右手を引かれて左手の林檎の皮のつやゝかさを僕も今思ひ出した。建築中の中央卸売市場で労から出してはお手に投げるりべットが弧を描いて密柑の色だったのも思ひ出される。それからバスを待つ間の果物屋の飾窓に長々と白い横の深てゐた事も、淀川をのぼるランチの煙突に凭けて黒い門松の赤だ結ばれてゐた事も。刑務所の内に家でのつくり街を見る事が出来る。白い壁に囲まれて静かにそれを美しく思ふ。

夕方にふった。歩ける様にふったので寝台へ出て見たら前が空地だった。浮浪者がゐる。寝てゐる間は空に山を思ったけれど、その下はやっぱり郷会だ。大阪だ。心細い焚火に木切れの加へられる度に顔が四つも五つも赤く光る。残りた薬子を持った富さんの白い服が露台の下から出て突地に入って段々小さくふって焚火に近付いた。赤い顔が露台を仰ぐ。一人は帽子を取った。僕は思はず

手を振った。熱いものがこみあげて来て、焚火も赤い顔も白い服ももうぼんやりにしか見えない。

人間が自然と爭ふ性質のものでない事は山を思へば直ぐ分る。智性だ意志だと勿体つけていふけれどそれが結局何かの慾望に過ぎない事は山の峻しさがその山を形造ってゐる何れかの岩に関係してゐるのと全じである。そして慾望とは我々の意識してゐる本能の事だ。本能は必ずしも意識的慾望を通じて発動する必要はないくてその背後には自然のあらゆるものに共通ともっと大ふかが動いてゐる。人間と自然とはただ言葉の違なである。

春も夏も秋も冬もいつだって美しい。だから人間て随分楽しいはずなのだ。けれどもそれには人間がもつと自然と仲よしにならなくちゃ駄目だ。それを今の様に爭ってちゃ駄目にきまってる。爭ふ性質のものでないのに爭ふのは不合理だ。昔の偉い時季にも花の咲く時候にも毎年殆んど変りのないところから見て人間の生きてる状態の方が不合理なのに違ひない。不合理と今の世とはただ言葉の違ひである。

環境の動物といはれる程人間は順応性が強い。環境の変化がその順応性の範囲内に止る間、人は自然と仲よく暮す事が出来た。然し変化の速度がさしもに強い天性を破る程に加って来ると人は自然と爭はなければならない。

世の中は與へられ過ぎる者と與へられなさ過ぎる者と與へられた者はその不当に與へられた者とに分れ過ぎる。不当に與へられた者はその溺か過ぎる部屋と暖か過ぎる寝床に刺れようと一生懸命努めるけれども、元来彼の身体はその心と全様余り上品に出来てゐないから幸福を数ふためには胸の空く早春の風にもわざと窓をすぼめて見せねばならず、微熱の戒れない限り極まる身体をも却って誇らなければならない。不当に與へられ過ぎる者はその貪し過ぎる四とつめた通やう進に刺れようと努めるけれども元来彼の身体はその心と全様ぜんぶに下品に出来てゐないので、天しかるべき師走の雪も少しの酒のふいために増らしく、長閉に囲る春雨も身を置く所場のないために怨めしい。

中間が多からず少なからずやさきそうに思はれる。けれども自然と仲よく暮してゐる者ならば心に思ってゐる事をその儘姿に現はす事が何で禁じられよう、一日の長い時間を規則正しく慶と中の中に送る事が何で健康法であり得よう。猫子とかの内に寝て見る大阪の空にも恩ふのは人がを然と仲よくしらればならない証拠であり、悪しい健康法が守れずにこうして寝てゐる者は人には自然と仲よく暮す性質の元だある事のしるしである。

今日も暮れた。浮浪者の貧天が天ようく未い今日は一日掛りで次を振ってゐたもう屋根も出来てゐる。新築祝ひに又菓子を増らうかと思ふけれど、一杯の同情と共通の不満を胸に抱きふが

ら、彼等と共に勇ましくそれを現はす事の出来ふい自分がようべと全じ様に手を振って彼等に同志の合図をする事が果して許されるであらうか。

（バッタ）（六、二、一）

辯明

一、横手山眺望の件、前号所載横手山の頂上は眺望がきかぬそうだと云ったが、Mさんからの注意があったので訂正します。あそこはとても眺めが好い所で、佐渡はおろか、晴れた日は浦島、西伯利亜鉄道の烟が見える――はどうかと思はれます。

一、比左良の件、第一年第二号の酒十慾英方の項で、比佐良とあるは比左良の誤りでした。印刷の方の間違ひからかまひませんが、原稿の違ひですから気にふって ふりません。至って神経過敏ふ性質であの一字が気にふり出すと夜も才チ〳〵眠られないとは――どうかと思はれます。

一、隅三間のかしイの件。孫さんの談に隅三間のカしイは口に上せた〳〵召し上ったと云ふ意味に非ず、しやべったと云ふいと云はれるから、筆者の思ひ違ひかも知れふい。何しろあの蜘蛛の糸の様に後から〳〵繰り出す大法螺、小法螺の数々に、どの嘘がほんとふのか、どれがほんとの嘘ふのか分らず、誰であったか、彼であったかのけがをつめもつかふくふって、つい――ではどうかと思ひますけど。

記録

一月一日――四日　熊野湯、村尾金二、近藤恒雄、高橋要二、松木謙三、

一月一日――五日　野沢温泉、小栗吉雄、

一月三十一日――二月一日　牧野、吉沢一郎、五十嵐敬馬、

二月十日より　赤倉へ　高木英二、

消息

奥野鋼重、札幌市北三條西二ノ二国際通運株式會社北海道支部内

渡辺九郎、病病を病って一月下旬約二週間入院手術をした、経過良好、

近藤恒雄、来る三月十七日結婚式を挙げる予定、

森竹五郎、近々洋行の噂あり、

高橋要二、一月二十四日結婚の式を挙ぐ、

中川孫一、二月十二日より一週間大阪に出張す、関西の連中は皆達者の由。

一月例會、　成野一行の鹿島槍行の話に耳を傾け得意の十六〻りに皆がぽーっとしてしまった、物凄い程良く撮れた寫真を皆が焼き増しを頼んだ。後は七兵衛氏得意の懐談でお正月らしかった。

（二月例會の記は紙面の都合上次号に譲る）